

## 人間味の深化を願う 領域「人間関係」の指導

宮田 暉朗

人との関わりによって生じる不安やストレスによる人間の破壊的行為が頻発している現今、豊かな人間関係によって熟成された人間味あふれる人たるの成長への希求は大である。そこで軋轢から生じた事件から問題点を抽出し、教育要領を軸にしつつ「仲良しになることで自己実現できる幼児教育指導計画作成」の今日的提案を試みる。

### はじめに

人間関係は人と人が関わりあうあり方ととらえていいが、人とは動物学上のヒトで、人間となると、関わりあって生きる人格を持った社会性の保持能力を持って他人と共存することで人格形成をしていく宿命を負いつつ生きる哺乳動物となる。かつては、人と仲良くするなど当然のことだったが、豊かさの所産がして人間関係という概念が生みだされ、競争社会の中で、追い詰められた不安に耐久できずにとった解決策が、自他への破壊という攻撃行為の多発社会になってしまった。

時代ごとに養ってきた感性と悟性を伴う行為が薄れ、公共性を失い、多くは日常生活で非常識と矛盾に苦しみ、戸惑いと自信喪失が増幅されて起きた事件が多い。家庭内の人間関係の軋轢で、再婚同士の夫婦が、しつけと称して体罰を加えて幼子を殺すとか、裕福に育った女性が、夫を殺してばらばらにして遺棄、歯科医の家庭での兄が妹へのばらばら殺人、等である。学校では、いじめ、不登校は減らずに被害者の子どもの自殺の頻発。万引の中高年齢者増加等がある。

これらは、不信感から人との関係に破綻を招き、善良者が憎悪によって破壊者に変化することを表し、人間関係の処理力をつけないと豊かな人生に翳りが生まれ、破綻か、精神疲労や、心身症に陥りやすくなるという証明である。従って、人間性を回復と、人間味ある情緒と感性に裏打ちされた強さが必要になる。これによって成熟する温かな人間関係を人格形成に寄与させねば解消できない。

2年間甲子園を熱くした田中投手は、プロのチャンピオンの前日、インタビューに答えて、「やれる自信はある。一つ心配なのは、年上の人が大勢いるなかで人間関係がうまくいか心配です。」と答え、人間関係が自分の成功の鍵であることを明言している。

企業が求める学生の資質で短大生に求める能力の第一位は「コミュニケーション能力」で、実に66, 7%である。以下、明るさ、熱意、協調性、学力、常識、バイタリテイ、マナー、ストレス耐性、信頼性という順位という。(ハローワーク調べ平成19年2月上小管内) 人間関係をつなげる能力が社運を荷っていることを示し、コミュニケーションができないものは採用されないのである。

そこで、筆者がかかわってきたできごとのマイナス要素を分析し、「人間み」を深める人間機能が作用するための必須項を抽出し、不安とストレスを重ねさせない予防的幼児教育計画を論じたい。

雪投げをやめない児童に40歳台の男性が暴力を振るったということがテレビニュースになる時代である。原点を探ってみるべきである。

## 一 よりよい人間関係の推進のために

まず、「変貌した日本人の処世術観」について明治期から概観する。

維新政府の国づくりのための教育制度や内容は誇っていいが、明治6年師範学校が作った「下等小学教則」をもとに各県で規則を作るもの人間関係に関する内容は、「先生に反抗してはならない。子ども同士は仲良くすべき。」という規範の押し付けが主で、「こうすれば罰するぞ。」という、学校に都合のいい規範であり封建時代と変わらない。複雑な人間関係はないことを証明している。

明治6年青森県発令、「小学生徒心得」は「遅れるな、よそ見や雑談するな、便所を汚すな、無用な所に寄るな。人を誹議したり、無益の議論をするな、ただし、文学問答はその限りではないが、礼儀を失わず、傲慢不遜の語を出さない。」等を成文し、人間関係面は礼儀と傲慢さに触れている。

その後 教育勅語によって、道德の徳目を絶対化して型から入る指導になる。明治20年になると各学校で小学校則を作るようになるが、上記小学校でも校則の中身は大きくは変わらず、言行を正し教師の指示に従うべしと定め、第五章に懲戒が規定される。このように初期は高い教育理念の提示はなく、規範の押し付けで始まり、国のために行う教育体制が固定し敗戦まで続くことになる。

長い間叩き込まれた「善人たれ」による人付き合いの基本は、しがらみの中での義理とか人情とか恥をもとにする儒教精神保持は終戦を経ても、昭和30年頃までは効力をもち続けた。が、長年の押し付けによる権力への鬱積と敗戦後の個人主義と自由性の取得が、所得倍増実現で拝金主義を産み出し、処世術は、わずらわしい、めんどくさいと変わり、家族内では我が家が生きるための価値観を深める人間関係が後退する。社会では、汚い生き方がはびこり、学校教育は、虚偽の人間関係の中で生きる仕方が進行中である。今こそ黙視せず温かな方策を立てねばならない。

コミュニケーションの手段としての言語も、38年頃からテレビの影響が色濃く始めて、言葉が短くなり、その風潮は人間関係も切り捨てることにつながり、拝金主義は言葉と道德性の面でも人格切捨てに加担した。恥を知り人情を誦いあげ、わび、さびをも包含する高い文化的価値を一気に下落させ、自分を省みるより、悪いのは他人という外的要因にする妄想が定着しだしたのである。

しかし、日本人の中にある謙虚さと継続力は民族の深奥に在って滅びてはいない。今は、物になりつつある人間に対しての危機感を持ち、拝金主義からの切り替えを願わないものは皆無といえる。ただ、あまりに複雑な要素が重なり合い、多忙な生活の中で逡巡中に手遅れになっていくのである。

人間関係は当たり前のごとで論議の余地がなかった時代から、わずらわしいから切り捨てたいと変わり、どうすべきか不明だという時代に入り、お金による価値換算の世相下で、人とのかかわりを、誠実さと安心感が生れるように抜本的に見返すために、その前提に4項目を考えた。

- 1 家族内の人間関係の改善を子ども中心から、それぞれが何をしたいかという願いに沿った関係作りへの変換と父親の威厳の矜持と母性の回復の生活化
- 2 言葉を伝達だけでなく、通じあうことで人格形成をはかる具にするために、正しい言葉遣いは己自身の恥じない生き方から発するものであり、自身の主体性と相手との連帯感の連結の中で熟成されることで、よりよい人間関係を成り立たせていくべきものであることを体験させたい。幼稚園から楽しい会話法を取り入れ、何を言われると楽しくなり、その逆についても理解させることによって、人を喜ばせ、自分を励ます真諦一意の会話法を会得させたい。
- 3 心の傷、不安を癒す処理力は幼児期から持たせ、受け皿は国民的課題とすべきである。

#### 4. 国民的課題としての触れ合いの場でのコミュニケーションの推進

##### 二 家庭・学校・社会における人間関係が主因の事件

18年のサラリーマン川柳 「妻・子・俺 格差社会 我が家にも」詠み人不明。広がる格差は、教育費にお金をかけられる家庭がより高い専門的教育をつけられる時代になったといわれる中で、彼の悲哀は愛すべき家族の中で最下位のランクの自分の序列を悲しむ一方で楽しんでいる姿も浮かんでくる。ただ、地震、雷、火事、親父、の序列でみた父権の乏しさは否めず、格差社会が見えてくる。

人間関係が原因で発生した事件から、ある共通項が浮かんでくる。例を挙げる。

学校教育での例で、発達障害と診断される少年が掃除中に立っていた。彼にしてみれば、サボろうとしているのではなく、すべきことが分からないからそうしている時、「掃除やろうよ。」と促されたとたん切れて暴れてしまった。

昨年、小学生以下の子どもの殺害は105人。11月には、下校途中で7歳の子ども二人が殺害され、岐阜県で5歳の幼稚園男女が刺殺された。

家庭では、ドメスティックバイオレンスによる傷害887件。17年3月に、中学2年生が父親に「学校に行け。」と言われ、累積した不安と不満がして家に火を付けさせて2歳の長女が焼死した。

以上から、人間関係の処理や処置が「問答無用の一件落着手法」にあることへの警鐘があり、言葉等の作用による逆切れが指摘できる。解決に向けた温かなほぐしと人間味の育成両面が欠かせない。

##### 学校教育下での「集団で個人を虐待する具体例」と対応

Dさんは、小学校の時に、鳥を逃がしたことをめぐりやり取りでいじわるを受け始める。

小学校1年時、一人遊びが多く、仲間に入るように誘っても、自分からは入らないが、結構楽しんでた。2年、グループ活動で意に沿わないと外に出てしまう。3年時男子から疎外され始めた。4年、学習用具を忘れる。人間関係がうまくいかない。5年、身なりに無関心。6年、人間関係がうまくいかない。という傾向にあったことを保護者は懇談会でも聞かされていたという。

Dさんの危機は3年時にある。この時の指導が人間味あふれたならば、優秀な児童で過ごしたことは間違いなく、中学校入学後の二学期から完全ないたぶりに発展する。グループ作りになると、仲間が逃げ出したり、後ろから消しゴムのくずが頭からかけられたりする。特にクラスで一番成績がよくて元気のいい男子が主導し、発言でつかえと「早く言えよ。」と嫌がらせを言う。席替の時には隣になった人に、大声で「かわいそう。」と言った。音楽のパート練習中「仲間に入りなさい。」といっても「わたしはいい。」と言い、悩みはいつも晴れず、女子も勢いのある男子に合わせ、盾になる人はいない。当然、眠れないから、学校で居眠りをすると、「寝るな、馬鹿。」と罵声がとぶ。

「てめーが～部なんて信じられない。とっととやめろ。」「死ぬ。」と書かれたメモもまかれた。

これらの行為に反発して、母親が立ち上がろうとしていた時点で、A先生は、「男子には根深いものがある。彼らの人間性が疑われる。母親とのスキンシップが欠落していたのではないか？本人は個性が強いので、協調性は身につけねば。」と指摘した。

B教諭は「教科書を開かないことが多く、教師の注意が必要。本人も人に対してきついことを言う、身勝手な面を持っていることに気づいてほしい。現状をあきらめずに自己主張すること。自分から仲

間に入っていくこと。」を指摘した。担任は、「ルーズな面が目につくのでその点を直し他人とのかかわり方を考え、友が少しでもできるといい。」と述べている。

教師は多くの生徒からノーを突きつけられることを恐れ、解決策に具体性がなく、本人の欠点を直すことを指摘し、親身でない。しかし、筆者を中心として生徒に味方を作り、教師が本気になって、集団対個人のねじれた関係をときほぐしていき、6ヶ月かかってまったく正常になっていく。

その過程で、父親は、「Dは集中心がたりないし、すぐに飽きてしまう。つらいことがあっても身にしめないことがある。小学校の時にじめられてもずっと黙っていた。母親が、Dが言うことを聞かないので、大声で怒鳴ったときに『わたしだっていじめられているんだ。』と、泣き叫んで、大暴れした。中学一年の入学式のとき、ばい菌といわれ続け、これに反発してますます広がった。」と、深い慈愛をもって述懐された。結局、母親の活力と父親の慈愛と公にした学校の努力が解決につながる。

ここから学ぶ「学校教育下の「集団対個人の人間関係」の改善策は6項目がある。

- 1 いじめの原因は必ずある。長い間にたまった不安や葛藤は人格にゆがみを起こしトラウマとなるので、被害者と当事者同士が相手との関係に置けるかかわりの目的分析をしてよって来る悩みの分析を通して対応を皆で考える。このとき遊びやゲームから入り、もっと仲良くなる方法を討議して決めだしつつ次の段階に進み実践する「輪状のサイクル策」がほしい。
- 2 母親が同じ部に所属する生徒に「仲良くして。」とお願いし、相談相手になったら、その生徒がいじめられて不登校になったので支える人づくりと人間関係の環境作りがいる。
- 3 先生は予防に徹し、初期の段階での解決が大事になるので、人間味にあふれる相談相手として相談のプロとしての技法を身につけたい。
- 4 Dさん事件の年、メンタルアドバイザーの聞き取り調査による県内の中間教室の生徒の登校拒否の原因のナンバーワンは「友人関係」である。そう回答する小学生本人が29%、保護者が15%、中学生では本人が50%、保護者が32%である。中学生は学業の不振などがこれに続く。先生が原因となるというのは小学生の保護者が16%、中学生の保護者が11%である。(信濃毎日報道) 結局、友人と先生との人間関係のもつれや理解不足が不登校やいじめなどと因果関係にあることは軽視できない。
- 5 家庭の人間関係の安定に父親が欠かせない。両親は愛情の伝え方を適切にすべきである。
- 6 おもいやりや人権感覚は日常のふれあいの中でけんかしながら体験を通して身につくものである。倫理観を養い、耐えることを教え、事件の後の後付を大切にする。

#### 多忙夫婦が育てた「いい子」の急変と裕福な家庭の兄の破壊行為

中学校2年までのCは完璧な女の子で、働き者の両親と弟が一人いる。毎日二人で夜明けまで働き、朝方から眠る習慣があるので、小学生の時から母親代わりで朝飯夕飯を作り、勉強も良かったが、3年生になって突然切れる。何で自分だけが、こんなことをしなければならないのかと疑念的になると同時に、爪に色がつき、金髪、口紅、そして喫煙という反社会的行動をとり、言葉は「うるせー、うぜーえんだよー。」に変わり、夜も帰らなくなった。親に失望し長く忍耐を継続した結果、自分の人生を恨み、その原因を作る親と弟を恨み、憎悪することで不満を爆発させる。

この事例は、どうにもやり切れない時は、死、または、代償としての人への嫌がらせ、か、反社会的行動に走る傾向を示し、親の後ろ姿も大切だが、明確な愛情表現の必要性を示している。

裕福な家庭の兄弟の反目の果ての妹殺人が起きた。妹の短大生が鈍器で殴られた後にばらばらにされた。兄が犯人で、三年間会話していなかった果ての事件で、動機は妹から、「兄の真似をしているだけで、4 度目も受からないダメ男だ。」となじられた瞬間の決着であるらしい。裕福な家庭で、妹は自由奔放で親も映画に出るような奔放さを家柄という面で心配していたという。5 年間会話しないなどの家族のかかわりの仕方や幼児期のしかるべき育ちの大切さを暗示している。

そこで、この二つの家庭の人間関係破綻が示唆する課題とその対応を考察する。

普通の父親は忙しく、家族と触れ合う時間が短いから、とにかくいいお父さんを装い、叱れない。母親は「～しなさい。」という一方的指示語が多くなるので、子は自分で選択して動くことが少なくなり、何か失敗した時も、自分以外の他に責任があるとする外的統制型になりやすくなり、厄介なことに、そのタイプの育ち者は切れやすくなるといういい。

多忙すぎると、会話が欠け、発達段階でつけるべきしつけや抱きしめなどの愛情表現がなくなる。

まだ小学校に入学したころは、自分の中の育ちの傷に気づけない。しかし、小学校の高学年からほころびだし、自分と他人の性格の違い、動作の相違を通して、生育暦を掘り返してみると甘えや、しがみつけない自分を発見して、親をぎょっとさせる行動をとることがある。Dさんはまさにこれに該当する。中村延江は「子育ての心理学」の中で、「生れたばかりの赤ちゃんも母親が笑うと笑い返す。乳児は能動的に働きかけをする、親が応えてくれるから満足感や安心感を得る、これによって親子の基本的関係が培われる。」と、指摘する。つまり、子どもの中に、親子の絶対的信頼関係が結ばれないと正常に育つことは困難な時代であると認識を変えねばならない。

乳児期のスキンシップは当たり前であり、いわゆるギャングエイジでの自分勝手さも経験させなければ正常に育たなくなる。しかしこの時期に型にはめ、いい子にさせる傾向が強すぎるのではないだろうか。さらに、幼児期に虐待を受けたり、いい子過ぎてそれを装う生き方が連続すると、親に捨てられる恐怖をもって生活するために、自分の中に二面性を育てていくことになり、青春期になると生存していることへの懷疑になったり、アイゼンティティにゆがみがでて暴発したり、生涯にわたって苦しみ、その子どもも同じような繰り返しになることが多い。

また、家庭の虐待、身体的、性的、心理的、ネグレクトなどを発見し保護するために、専門機関の強権が必要であると考える。

#### 社会における事例

宗教団体主宰の金という男が少女7人暴行(平成17年)・45歳の息子が83歳の母親を看護疲れで殺害(平成17年2月)・出生届を出されなかった20歳の仮名を掛けない男性の存在。(平成18年2月4日)・騒音おばさんという方が、近所の人に「引っ越せ」などと大音声の嫌がらせを毎日繰り返した。政治家の金銭問題、どんなに罰則を強めてもなくなる酒気帯び運転、育児放棄やお年寄りの手になる殺人事件と万引きの増加など枚挙にいとまなしであり、テレビで誰かが謝罪していない日はなく、「殺人がないということがニュースになる時代」に突入した感がある。

親しくすべき人への働きかけの欠落が多い中で、殺害とか、暴行、妨害など生命に直接関係する結着となってしまう原因を人間関係面での見直しがある。老後保障、健康維持、安心して子どもを産める等の国策は勿論、幼稚園、諸機関学校などは監督下での指導援助の抜本的見直しをするべきであり、家庭では、他人との関係づくりについての見識のみかえしがほしいし、家族単位で人生に

対しての我が家の設計図作りをこそ、もっときめ細かく作成する必要があるだろうか。

### 三 幼児期の人間関係の指導企画

夫婦の危機などを抱える母親は情緒的に不安を抱えるので満たされないから、攻撃的になるか、まったく反対の無気力になりやすく精神は高ぶっている。従って、わが子がどうなろうが目に入らなくなる。子は、敏感にそれを感じとるから、一生懸命に嫌われないように身を処することに徹しようとする。この状態が続くと、いつも二人の自分の存在に悩み、心に傷を負いながら、人間関係で演技せざるを得なくなるであろう。積もった障害は代償行為を求めて自分でも分からない処置を取ることになり易いので、出発点である幼児教育における人間味育成という観点で「人間関係」を吟味する。

#### 幼稚園教育と自然な人間関係

幼児が周囲に対する信頼感を抱けるようになることが幼児教育の前提である。それには周囲の人が、環境を作り変えながら自分を変えていく能力を発揮して楽しくなることを見て、小さいながらも、自分もその芽の育ちを実感していくことがエンジンとなって前進するという環境整備が必要になる。

- 1 人間関係は人が生存する限り存在する宿命的潤滑油でありこれがないと生きられないことを理解するために、「仲良し」をキーワードにしたコミュニケーション要領を集団の中で会得する場としての幼稚園や学校教育とその素地力を作る家庭教育の連携
  - 2 幼児期において、作ることで関わりを深めて友と和む場に重点を置く保育
  - 3 人と付き合うよさを実感し敬意を培うために、共感ができるための男性の生涯学習への参加促進と家庭教育への参加への援助
  - 4 身近な人との関係改善と他人との人間関係を深める能力の育成のための大人への社会教育
  - 5 惻隠の情をのせる言葉の使い方ができるようになるためのボランティア参加の推進
  - 6 幼児、児童生徒の人間味あふれる行為についての社会全般での称揚
  - 7 響きあい余韻が残るような人間関係を遊びや放課後のふれあいで作る義務教育と幼児教育
  - 8 恐怖と不安による仮面をかぶらざるを得ずに育った子どもの日本社会全体の癒し
  - 9 実際に自分で体験し考えるために、気持ちはどのような動きになって作用するか、特にいやな気持ちになる状況理解と、遊びの中で感性と人間味あふれる感情体験ができる幼児教育
- 頼れる教師が幼児の人間不信感を癒し、トラウマの解消をはかりつつ、自立力をつけていくために快感と逆感情を体験する場を仕組み、問題が起きたら早く対応し処置をしたい。

#### 領域「人間関係」と究極の仲良し形成の原則

幼稚園教育の目標は「生涯にわたる人間形成の基礎を養い、生きる力の基礎を育成すること。」と定め、続けて五項目の目標を示している。概略は「基本的な生活習慣と態度。人への愛情や信頼感育成と自立共同の態度と道徳性の芽生え。身近な事象への興味関心育成。言葉への興味関心を育て、喜んで話し聞く態度と感覚の育成。豊かな感性、創造性を豊かにする。」である。この目標は、そのまま①健康 ②人間関係 ③環境 ④言葉 ⑤表現 の五領域に、対応している。

目標(2)は「人への愛情や信頼感を育て、自立と共同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすること。」と規定して、領域「人間関係」に対応させている。領域「人間関係」の目標は「他の人々と親しみ、支えあって生活をするために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。」ことにある。

ねらいは3項目があり(1)幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。(2)進んで人とかかわり、愛情や信頼感をもち。(3)社会生活における望ましい習慣や態度を身につける。と規定する。それを実施するための「内容」は12項目がある。その概略は、「決まりや用具を大切に先生や友とかかわって、自分で考え行動し、できることやすべきことを通して、喜びや悲しみを共感し合う中で、友のよさにきづき自立する力をつける。」ということになる。以上をふまえて、人間関係の指導を「仲良くなるために」という本論の趣旨にアプローチするために指導計画立案の留意事項を決め出したい。そのために、個の発達程度や行動や処理様式を精査分析することから始めたい。

- 1 各人の生育暦をふまえ、園の教育目標と教師のその児童への願い、家庭の方針、園児の仲良しについての決意や願いをもとに一人一人の園生活設計図を書いて、週ごとにカンファレンスを通して次の育成方針を定め実践し、常に大勢の目で評価していくこと。評価のないところに策は立たない。指導そのものへの評価は次の手立てを生み出すものになることを再吟味したい。
- 2 五領域一つずつにおける個人の指導計画をつけるべき力との接点でカルテの作成がいる。
- 3 年齢別発達状況について見返しと実態の記録が必要である。

#### 教育課程の改善への提案

- 1 生活体験を通して自我の形成をはかり、生きる力を培うことの中身の理論形成
  - ① 自然体験、社会体験をした後の評価から次の段階の目標とその推進手立ての作成
  - ② 幼児期にふさわしい知的発達を促すための個の発達段階の再分析
  - ③ 自我が芽生え、自己を抑制しようとする気持ちが生れる幼児期の発達の特長への対応としての会話教室のカリキュラムへの導入
  - ④ 集団とのかかわりを通しての自己実現ができたという成就感の実感ができた事例累積
- 2 人への愛情を育てるためにルールがあることをもっと厳しく教える一方で、気持ちいいこと、してはならぬことを理解する道徳性の涵養の重視と推進
  - ① 道徳性を身につける場面の設定。正々堂々とぶつかれる勝負とその結果のフォロー。
  - ② 仲良しになるための遊びや活動を通して、もっとうまく遊ぶにはどのようにするか考えさせて幼児自らが修正していけるような場の企画
- 3 人間関係をつなげる手段でもある会話について領域「言葉」、領域「表現」との一体化の授業
  - ① 思ったこと、考えたことを相手に伝える力、特に、生活の中で自分がつらくなった時の気持ちや気持ちが良かったときの体験を個や集団に伝える機会をとる。
  - ② 視聴覚教材、本などで仲良しの持つ良さを味わい、お年寄りや障害を持った幼児、動物との交流を通していたわりの心情と社会性を養う。
  - ③ 疑問のことは聞く習慣をつける。感動することの限らない体験の機会とその表現する力をつける。
  - ④ 地域の人や文化に触れる。
- 4 家庭や地域との連携と家庭教育への援助の見返し

家庭との連携はお互いに難しい状況になりつつあるが、体にある斑点まで理解しないと心にしみこむ援助は厳しいといわざるを得ない。特に、虐待と大切にされすぎの幼児はその成育暦をつかむこと、それを話せるような両親との温かみのある人間関係作りが根底にある。

## おわりに

領域「人間関係」は、自立心をつけることを目標に他の人と親しみ、支え合って生活することを通して、仲良くなる力を養うことが自立につながることを事例をもって述べてきた。

人間関係は煩わしい、避けたいものとして定着しそうな現今であり、人間関係の決着の仕方が暴力とか死ということも気になる。心に傷を持った人の心身症や精神症発症も増えている。しかも、最近では、人間関係を互いに関係ない間柄では成立させながらなのに、人生を豊かにできたり成功するには、人付き合いのうまい方が有利に作用することに対する多くの苛立ちもあるといえる。

小さい時からスキンシップがあり、豊かな会話があった人は、コミュニケーション能力は豊かだ。しかし、誰でも信頼感にのっとって感情や思考伝達や意思疎通をしあうことは難しい問題ではない。ただ、人間関係をよくする仲良くなることをただの技術としてとらえるのではなく、仲良しは自我形成の条件であり、信頼関係作りの可否にかかってくるので、とにかくかかわり、自他を繋げる能力としての心情の深化や優しさの形成をはかりたい。さらに、自分の可能性や希望の実現には人と付き合うことによって発展することを確認したい。特に、乳幼児から幼児期は家族のまともな愛情によって基礎はできる。なかんずく夫婦の仲良しこそ子どもの人格形成のコアであることは間違いない。ゆえに若い夫婦の国家的援助も急務といえる。不安からくるとげとげしさから解放させねばならない。

人間の変容は難しい、しかし、共感したときには自己の本音の部分で、等質的快さの触れ合いによって異質の質的变化を起こすことができる。このとき、葛藤やつまづきをより多く体験させ、これをじっくり問いかえし余裕の中で笑顔に変えるような幼児教育が必要で、これによって、生涯にわたって生きる力をつけて、優しさ発揮が期待できよう。幼児期からの自我形成に質的変容がないと人間破壊に対応できない時代である。その人間らしい変化は、関係ない人とも関われるようになる世の中を皆で作りと、その大海で幼子を遊ばせることで発展できよう。まえがきの雪の男性のように方法は別としても関わることは必要である。

## 参考文献

- |                 |        |           |
|-----------------|--------|-----------|
| 子育ての心理学         | 中村延江   | KKベストセラーズ |
| 人間関係が楽になる会話心理学  | 池田朝子   | 日本医学出版    |
| 困ったときのコミュニケーション | 菅原裕子   | PHP研究所    |
| 人間関係            | 柴崎正行   | ひかりのくに    |
| 保育内容人間関係第2版     | 友松諦道編著 | 建帛社       |
| 保育内容シリーズ人間関係第2版 | 谷田公昭監修 | 一藝社       |
| 幼稚園教育要領解説       | 文部省    |           |
| 人間関係 理解と誤解      | 加藤英俊   | 中公新書  その他 |